田村

次第

ひ影の路橋きよく九重の
春に急がむ

早詞

是ハ東国方より
出たる僧にて候我こゝに秋を

上歌

これは頃よば我思ひたちては
はもちや孫生の玉みちく
影も色よめくはる月の里は寺
うすきや斎羽山際乃ひゝきも

静なる清水寺に来にくく
世乃深しき秋の夜をけと共に
くわ地主権現乃ゆ敷きの里
未花の咲所木はしとい色とも
大悲乃ひかりに法えかへり
清き所地主の桜よしくゆきなし
ざら林たまや大悲大悲乃勢の花

ずゐのさとふかうはしをかご三十
三万所秋乃月で濁の水にみあけ
きよし　千手観神乃清庭の雪
なをや　白ぬる雲も果んえも
理まをくばき桜の梢をめぐみ
誠さは八重一重実九重乃車所
そうつ四方所山なりえをの清りつ

こ、、、、一、一、一八ル一、一、下七、、ご

ゞ晴るゝみ由紙しきりなく

早詞 〽いかにこれなる人に尋申へき事の候

三下詞 〽こなたの事にて候か何事にて

候ぞ 早 〽見申せハいつくしき人なたまの

はゝきを持ず木陰を清め給ふ人ハ

ゞ若花守にて候か

早 〽さん候

是ハ此地主権現に仕へ申者也

ゞいつも花の比ハ木陰を清め候

程にゞ花守とや申さんゞ宮つこ

とや申へき哉ゞけにによしの者と

清境りん 早 〽慈悲白給座を遊巻庭ふ

ゞ先々當寺の由来歴委く御物語

候へ 三下詞 〽抑當寺清水寺と申ハ

大同二年の御草創坂の上乃

田村丸乃清水寺なれハ昔大和國小
嶋寺といふ所に延鎮といへる
沙門正身の觀世音を拝み奉らんと
誓しまゐ時に淀河乃河上より
金色乃光さしけるを尋のぼりて
みれば一人の老翁ありかの翁
語ていふやう我ハ先行叡居士と

いへり汝一人の檀那をまちて大
伽藍を建立すべしとて東をさ
して飛さりぬさてハ行叡
居士といつぱ観音薩埵の
御再誕ぞ檀那をまてとありしハ
さて坂の上の田村丸とぞ
なかれ流も清水のふかく源き

ちりひも数とよ千年乃ためしを
とわく様々の姿おもしろく
國土萬民をもらさじの大悲乃
誓ひのかぎりなき実や安楽世界より
いま此娑婆に示現して
ためのの観世音仏のかくれもなき
那多へしやく 全は西ねむ

人小宗是のひろはず見て渡唐
たくえ三郷か所まてかはらん
清なし通人へ ゆたかな人
義中は庵し 先南にあつたて
塔婆のみえては是らの高野所
まそなる あまたの嵯峨中山
清涼寺も嵯峨まのみえてさる

又此に當津寺の道のゆうえんを
いりの紫清るみそくろう　あまたは
うへ見ぬ鷲の尾の寺や音羽乃
山の峯よりも出たる月の影かく
やさしくば地主の桜に縁る気色
げに見さう清浅しさとなれ
実にこの桜さういのち乃おし

ぎりと心なき妻の一時　実情も
惜し　惜し　夢へしや　此宵
一刻あたひ千金花に清香月に
この寒き　実千萬よもの惜しとは
どく此時のや　あゝし　面白の
地主の権の氣色屋が桜のこの
まゆ小も糸月の雲も小糸あ流の

きえし巣と流きて散やちる桜
那るらん　まつ那ミよ那ほし部ふ
むもの枝乃秋なる菊時め老ろ嶺
青陽なる信録まくる風のとりなる
中 青羽乃鶯乃白き羽ぐわか庵し
逢ひても雨白やまき紙屋にて呈
權輿のまる乃以ほもきとなる

上 たゞ標茅原乃さしもくさ
同 我世中ふすむ限りはの清禅寺
濁らし物を清ろみとまも
下 きれや青稲のぐまも枯しほ木
なかたまくりなみよりほひ
ほ清く乃りはもをしなへて
のと行まゝ聞い中吹乃天も花ふ

えくまやおもしろかりける庵や
蕉雨白露色や　実や気色を
乃どかなりけりたゞひと聞ぬ
雛乃天如何なる人やらむ
いふならさや君如もまつ雪比
誰をかまはこの寺の人は
暮さを徒流暮よ　かへ行や

いはゝかりとさのゝるをよ頼り
音をのいたきも知ぬ山中に
上地
あかなかなくも思ひたまはゝ
けりりこをみよやとて地主
権現の徳まへよわだたるのと
下
乃見しーおすさとて坂乃上の
田村堂乃軒もるや月のおたを

下七なしおきてゐるのさかひなれ
風條わりいつとなくまひなれ
上三よもひらきならや櫻のうけふ
一八〇まてづく花もたゞ雨る清乃浦
迷はぬ月の夜とともに此御経を
讀誦ひろく 後三ト上 あふれてふされ
清陰風に漂水なるの江義清なれ

まことに一河乃流を汲て他生の
縁となる旅人に言葉をかはし
夜もすの讀誦光を添大悲誓
觀音擁護の結縁なる 半上 めでき
風に花乃ひるまにかへやまそ
男所の人なれ 鐘のひゞき成
人まちかまし 三下上 川方面

同淺りつゝ世つ第人皇五十一
代平城天皇の御宇に坂乃
うへの田村丸が夷をたいらげ
悪魔をしづめて天下泰平の御願
各里しもが當寺の佛力まわ
志づのはまきみの宮にゆだね
ひゝの孫あくまを志づめ都

安全ならんとのおぼしめさま
よはふく子孫をとゝ乃へじゆに
おもむく時旅人ゆうわてば
観音の佛前にまいるわが祈念哉
ゆたし立願をしみかきさ乃
瑞験あらたなれば歓喜微笑の
枝ミ哉みくせてびうき見德よ

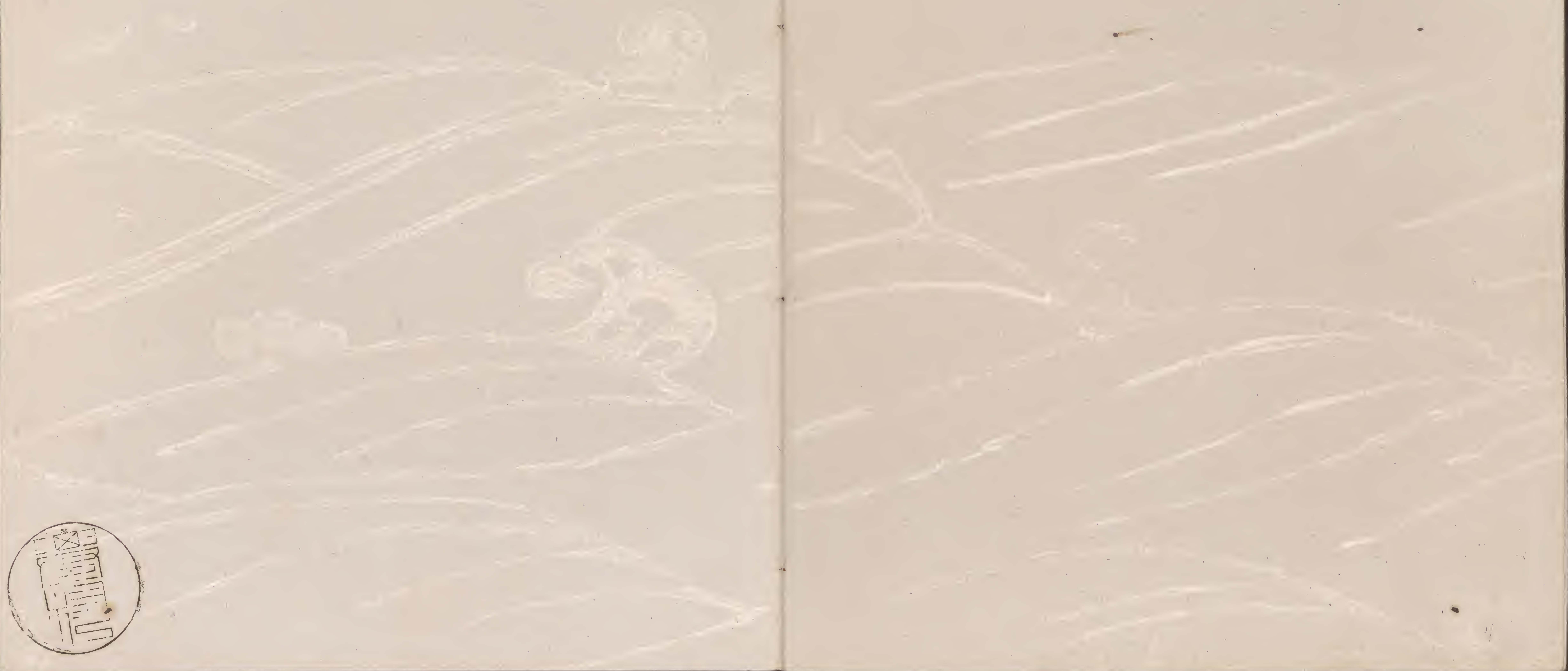
打立ちわ菩提の下寺なる中
いよ〳〵王地よあるきぬやぎぬ
なましるふまきてさへて
逢坂のやまをこゆき滑波乃
粟津乃森や新の石山るかなみ
拝み見も清水乃一佛と道乃え
あひふ何ふるや跡の此長橋

よみなしこまもあしなかへや
以る安くん院伊勢路乃やさ
をく弓馬のさもさまかまんと
すみきこ跡たる桜枝のまかも
名茶もいねめきそうけきんえ
あふう國乃ごもまも前大君乃
神國のまはや龍帝乃陽さうひ

佛力といひ神力もなぞ数くハ
方しをのづまはゞ無きこて
ちろ我康乃銀河の流猿き一世に
まれも思へ〻佳例なる處し
ざ従の山河なうこ其鬼神の
弁天ふしきまへちて萬木
守山動揺さす川のり小鼎神も

うけみきけ者もきるゐめし
あかうぢ平さて以ひし逢臣入り
流の魚一鬼も王位をそむく
天罰をそむきを流さは色
浮海ひうきうりましてや
まの徒かくはのり山掠殺みさは
得部おな海へく家乃くまはけり

むらたちきたりて鬼神ハ黒雲
鉄火をふらしつゝ数千騎に
身を変してやまのごとく見えたり
見えたる所に　あれ見よ
ふしぎやな味方の軍兵の
旗乃うへに千手観音乃ひかりを
はなして虚空に飛行し千の

御手毎に大悲の弓には智恵の
矢をはめて一度はなせば千の
矢さき雨あられと降りかゝつて
鬼神のうへにみだれ落れば
ことごとく矢さきにかゝつて
鬼神ハのこらずうたれにけり
がたし〳〵や誠に呪咀諸毒

藥王品觀音乃ちかひをあけさて
ひなりち蓮華經本人ひなたち
蓮華經本人のがらゝ我もひふ
くわこゝ於觀音乃佛力あわ